

巻頭言	学びの軌跡を「自分力」へ
	総合学習支援オフィス 部長 石橋博道……1
[WLC]	WLCの取り組み……2-3
[GCP]	GCPの取り組み……4
[SPACE]	2026年度春学期についてのご報告……5
[CETL]	CETLの取り組み……6-7
	データサイエンス教育推進センター……8

創 価 大 学 学 士 課 程 教 育 機 構 ニ ュ ー ス レ タ ー

学びの軌跡を「自分力」へ ——学習ポートフォリオが拓く成長のサイクル

総合学習支援オフィス 部長 石橋博道



創 価大学は、2014年の文部科学省「大学教育再生加速プログラム（AP）」採択を機に、学生一人ひとりの「振り返り」を通じた教育を推進してきました。しかし、社会情勢の変化や教育のデジタル化が進む中で、単なる記録の蓄積に留まらない、より高度な学修成果の可視化が求められるようになってきました。こうした背景を受け、2026年1月の「学習ポートフォリオ答申」を経て、同年4月にスタートしたのが本学独自の学習ポートフォリオです。本システムは、学生一人ひとりが歩んできた軌跡を「自分史」として編み上げ、そこから得られた学びを社会で活躍するための確かな「力」へと変えていくことを目的としています。

本取り組みが目指す核心は、学生の成長を多面的に捉えてディプロマ・ポリシーの達成度を測定・検証する「教育の質保証」と、在学中の経験を自らの強みである「自分力」として発見し、卒業後も人生の原点として振り返ることができる「自分史」構築の場を両立させることにあります。

本 システムでは、主に4つの主要機能が相互に連動し、「未来（目標）」から「今（行動）」をデザインする「成長のサイクル」を生み出します。

まず全ての出発点となるのが「未来スケッチ」です。ここでは、卒業時の成長した自分を具体的に思い描き、長期的な目標を設定します。目標は自身の成長に合わせて何度でも更新でき、その変化自体が成長の軌跡として記録されます。次に、その目標を「キャンパス・ロードマップ（4年間計画表）」へ展開し、留学や資格取得といった4年間の予定を時間軸上に配置することで、学生生活全体を俯瞰してデザインします。

この長期的な計画を学期ごとの行動に落とし込むのが「ステップアップ・ノート」です。ここでは目標を実現するための具体的な「挑戦目標」を設定し、学期末には成績や行動履歴といった客観的な事実に基づき、達成度を確認しながら前向きに振り返りを行います。この達成状況の確認と内省が、次の学期の新たな目標設定へと確実につながり、階段を登るような成長サイクルを回す駆動力となります。

そして、この振り返りを支える土台となるのが「自分史の記録」です。授業での気づきはもちろん、サークル、ボランティア、寮生活などの課外活動や日常の気づきを、デジタル・スクラップブックのように手軽に蓄積します。ここで蓄積された確かなエビデンスがあるからこそ、学期末の振り返りが記憶に頼らない深い内省へと昇華されます。

こ れまでの運用で大きな課題だった「継続の難しさ」と「入力の負担」に対しては、ポータルサイトと連携する「アクションログ機能」を導入しました。履修登録や学習施設の利用履歴、留学手続きなどの行動が自動でタイムラインに反映されるため、学生は一から書く必要がなく、この情報に「その時どう感じたか」など一言メモや感情選択を添えるだけで手軽に振り返りが完了し、蓄積の習慣化が図られます。

さらに、特定の条件達成で付与される「デジタルバッジ」などのゲーミフィケーション要素で楽しみながら記録を続けられる工夫を施しました。また、AIがチャットで目標設定をアシストし、ポジティブなフィードバックを届けるなど、学生に寄り添う「伴走者」としての仕組みも段階的に導入していきます。

今 回特に重視しているのが「内省」の質の転換です。従来の反省から脱却し、「今回の経験を次の場面でどう活用できるか」という問いかけを行う「ポジティブ・リフレクション（前向きな内省）」を掲げています。失敗や試行錯誤のプロセスも肯定的に捉えて未来の展望へつなげる思考習慣を育むことで、学生は自身の成長を論理的に把握し、就職活動や社会に出てからも自信を持って自らの言葉で「自分力」を語れるようになります。

「学習ポートフォリオ答申」が示す通り、本システムは単なる道具ではありません。教職員によるアカデミック・アドバイジングや、学生スタッフ（ピア・サポーター）によるコーチング的な支援体制も強化されています。システムという「道具」と、人の手による「支援」が両輪となって学生の成長を支える、これが創価大学の取り組みです。

今 後の展望として、このシステムで積み上げられた「自分史」は、学生が卒業後に社会へと羽ばたく際の「自信の根拠」となることを目指しています。就職活動や進学において、自分が何を学び、どう試行錯誤し、どのような力を身につけたのかを、蓄積されたデータと共に確信を持って語れるようになるはずです。これから本学の学習ポートフォリオは自律的な学びを支える基盤として進化を続けていきます。この取り組みを通じて、学生一人ひとりが「なりたい未来」を自らの手で描き、一歩ずつ確実に歩んでいけるよう、大学を挙げて支援を続けてまいります。学生の皆さんが、日々の小さな挑戦や試行錯誤を「自分だけの輝かしい歴史」として刻んでいくことを、心より期待しています。

創価大学とタイ・キングモンクット工科大学トンブリー校 (KMUTT) の 交流プログラム報告

創価大学は2017年以来、タイのキングモンクット工科大学トンブリー校 (KMUTT) と実りある協定関係を築いており、今回は2つの学生交流プログラムについて紹介します。

KMUTT海外語学研修：異文化体験を通して育む「世界市民」への意識

毎年春休みに開催されている学部生向け海外語学研修が今年の2月27日から3月14日の16日間KMUTTにて行われました。充実したプログラムを通じ、参加した学生たちが主体的な異文化コミュニケーションの担い手へと成長を遂げる絶好の機会となりました。

研修では比較文化をテーマに、現地の英語授業での学習や成果プレゼンテーションを実施。課外活動では寺院や博物館のほか、ペッチャブリーでのパームシュガー作りや世界遺産アユタヤでの伝統衣装体験など、タイの地域社会や歴史に触れる多角的な体験を行いました。

また、現地学生とペアを組む「タイ・バディ・システム」を導入し、自然な交流の中で協働して学びを深めました。

参加学生は「最初は英語に不安があったが、親切的な先生や仲間の支えで緊張がほぐれ、心地よく学べた」と、英語学習に前向きな感想がありました。引率のポール・ホーネス教授からは、「学生たちは比較文化の課題を通して自国の価値観を見つめ直し、社会的責任や世界市民としての土台を築きました。学生の意欲的な挑戦を称えとともに、本研修を支えてくださったKMUTTの皆様は心より感謝申し上げます」との声が寄せられています。



KMUTT交流イベントを開催！タイをはじめアジア諸国の魅力に触れる

学生交流プログラムの2つ目は、本学の国際言語教育専攻 (TESOL) 修士課程と、KMUTTのTESOL修士課程による2週間の現地訪問プログラムです。毎年、3月に本学から2名の大学院生がKMUTTへ派遣され、6月にKMUTTからも2名の大学院生が来学されます。この交流プログラムは、両大学の学生が大学院での学び

を深めながら、異文化交流や海外での指導経験を得られるよう設計されています。

本交流プログラムの大きな見どころの一つが、毎年開催される「KMUTT イベント」です。今年は6月17日 (水) の5時限目、WLC SACチームの主催により本学SPACE Arenaにて開催されました。

イベントでは、KMUTTから来校したシュウェさんとエイミーさんが共同プレゼンテーションを行い、タイの民族衣装や伝統的なお祭りなど、タイ文化の魅力を紹介しました。さらに続いて、参加した4名の学生（本学派遣生およびKMUTTからの受入生）がギャラリートーク形式でミニトークを実施。ベトナム、フィリピン、ミャンマーの自国文化について語り合いました。

ミャンマー出身の学生は、歴史的建造物や伝統工芸品、地元の絶品グルメなど、自国の豊かな文化を紹介。ベトナムやフィリピン出身の本学生も同様に、独自の食文化や交通手段、人気の観光地など、それぞれの国のユニークな側面を活気あふれる対話形式でアピールしまし

た。プレゼンターと参加者が直接質問を交わしながら交流できるインタラクティブな演出に、会場は大いに盛り上がりました。

当日は12名の創価大学生が参加。イベント後のアンケートでは、「他のアジア諸国の文化を学ぶのがとても楽しかった」「これまで知らなかった美味しい食べ物や観光地を知ることができた」といった喜びの声が多く寄せられました。終始明るくアクティブな雰囲気に包まれた今回のイベント。WLCでは、2027年にも再びこの素晴らしいイベントを開催できることを楽しみにしています。



■WLC 教員の紹介 田高信一講師



創価大学文学部出身の田高信一講師は、卒業後、大学で学んだ英語教授法の知識を活かし、都内公立中学校で5年間、英語科教諭として勤務しました。その後、米国カリフォルニア州立大学ロングビーチ校大学院に留学し、言語学の修士号を取得しました。2021年から創価大学ワールドランゲージセンターで非常勤講師を務め、2025年に専任講師として着任しました。現在は主に英語共通科目を担当し、初級から中級までの習熟度の学生を指導しています。研究対象は、外国語学習不安、レジリエンス（困難に直面しても立ち

直り、前向きに適応・成長していく力）、生成AIを活用したスピーキング支援などです。学習者が英語を話す際に感じる不安に着目し、その変化や、レジリエンスとの関係を研究しています。授業では、生成AIの音声対話機能を用いた個別練習と、ペアでの振り返りやグループでの会話を組み合わせ、実際の対人コミュニケーションへつなげる実践にも取り組んでいます。田高講師は、中学校での指導経験と自身の留学経験を生かし、学生一人ひとりが安心して英語に挑戦し、不安を乗り越える力と、自分の言葉で伝える自信を育める学習環境をつくりたいと考えています。

世界へ羽ばたく新たな力—GCP17期生、ここに始動！

世界市民の育成をめざす学部横断型選抜プログラム「グローバル・シティズンシップ・プログラム（以下、GCP）」。

2026年度、厳しい選考を勝ち抜いた精鋭たちが、GCP17期生として新たな一歩を踏み出しました。

本プログラムは、高度な英語実践力、論理的思考力、課題解決力、そして数理能力を身につける2年間の正課集中プログラムです。選抜された17期生は、書類審査に

よる一次選抜、さらに英語ライティング・小論文・面接試験を通じた二次選抜を突破し、高い志を胸に集いました。

GCP生は、所属学部の専門講義に加えてGCP独自の高度なカリキュラムに挑みます。同期と切磋琢磨し、先輩たちの温かなサポートを受けながら春学期の科目を無事に修了。秋学期からはさらなる高みを目指して日々の挑戦を続けています。

第22回GCP総会を開催

5月2日（土）、秋谷芳英理事長出席のもと、対面とオンラインを併用して第22回GCP総会が開催されました。

在学生報告では、1年生の遠藤正和さん（経済経営学部）が、かつて目指した箱根駅伝への道が途絶えた挫折を乗り越え、「今度は勉学の道で創価大学を世界一に」と決意してGCPに挑戦。選抜に漏れた友人の思いや学びの環境への感謝を胸に、「卒業後は金融分野で活躍したい。どんな困難にも負けずに徹して学び抜き、大人材へと成長する」と力強い決意を語りました。2年生の原杏璃さん（理工学部）は、高い志を持つ仲間と切磋琢磨し、自身の不安を自信へと変えた歩みを報告。春季のGCPフィリピン研修での挑戦やTOEFL iBTでの高スコア達成を共有し、今後は専門である「生化学」の知見とGCPで培った語学力を融合させ、人々の健康に貢献する革新的な健康食品の開発を目指す展望を語りました。4年生の齊藤心さん（法学部）は、交換留学先のタイ・タマ

サート大学からオンラインで参加。留学先でのタイ政府高齢者局への視察同行やインドでの介護ボランティアなど、自発的な挑戦の模様を報告し、「高齢者福祉政策に携わるため大学院へ進学する」と誓いました。

続いて卒業生報告では、国家公務員として中央省庁に勤務する11期生の中村舞人さんが、日々の業務を通じてGCPで培った「論理的思考力」や「即応できる英語力」が法改正や他省庁との連携に直結している事例を紹介。「進路選択の偶然性も含めて様々なことに挑戦し、可能性を広げてほしい」と現役生へエールを送りました。グローバル企業で海外営業に携わる7期生の木村朝香さんは、初期配属での葛藤や多忙な日々をGCPで培った忍耐力で乗り越え、社内選抜を経て掴み取った1年間のタイ海外研修で成果を出した歩みを報告。現在は念願の部署で欧州やアフリカ担当として奮闘する様子を語り、「今いる場所で挑戦を続け、なくてはならない存在へと成長を」と結びました。



GCP総会 活動報告（原杏璃さん）



GCP総会 集合写真

牧口思想とデューイの共鳴 —GCPチュートリアル特別講義

GCPの1・2年生が合同で受講するチュートリアル全体講義にて、文学部の伊藤貴雄教授による特別講義が行われました。テーマは、本学の創立精神の源流である牧口常三郎先生と、アメリカの哲学者ジョン・デューイの思想的な共鳴です。1899年、地球の東西で二人の先覚者が、それぞれ「地理」をテーマにした画期的な講義や著作の執筆を行っていました。彼らにとって地理とは、単なる地名や地形の暗記科目ではありませんでした。自分自身のささやかな生活が、世界の裏側にいる人々の活動といかに深く繋がっているかを想像し、理解するための学問だったのです。牧口先生は、身近な地域（郷土）での暮らしから出発して世界へと視野を広げることで、狭い「島国根性」を脱し、他者の幸福に貢献する

「世界市民」を育てるべきだと訴えました。この「価値創造」と「世界市民」の育成という理想は、まさに現代のGCPが目指す精神そのものです。学生たちは日頃、高度な英語力や数理能力を磨いています。しかし、それらはあくまで「手段」にすぎません。その技術を何のために使うのかという根幹の「哲学」を学ぶことこそ、創価教育の本質があります。世界を舞台に活躍する一員としての自覚を深める、極めて濃密で有意義な時間となりました。



チュートリアル全体講義（伊藤先生）



2026年度春学期についてのご報告

2026年度総合学習支援センターおよび学習環境調整室では以下の通り、学生へのサービス、学習環境調整を行いました。

SPACE 調べごと相談「レファレンス」

	4月	5月	6月	7月	春学期
アカデミックライティング/学術文章作法	0	0	0	3	3
演習（卒論）	1	0	0	0	1
その他	10	1	2	8	21
合計	11	1	2	11	25

対面、Zoom、メール併用

日本語ライティングセンター（JWC）

	4月	5月	6月	7月	合計
チュータリング（実施数）	15	36	39	129	219
レポート診断	0	24	0	51	75
合計	15	60	39	180	294

2026年度からLTD予習ノートのチュータリングも開始しました。

HELP DESK

■ピア・アドバイジング

	4月	5月	6月	7月	合計
予約あり	37	57	61	29	184
予約なし	80	44	43	27	194
合計	117	101	104	56	378

■数学チュータリング

	6月	7月	合計
数学チュータリング	15	29	44

2026年6月から数学チュータリングを開始しました。

オアシスプログラム

	4月	5月	6月	7月	合計
オアシスプログラム	76	92	120	106	394

学修環境調整

	経済学部	経営学部	経済経営学部	法学部	文学部	
申請数	3	12	3	14	46	
	教育学部	国際教養	理工学部	看護学部	大学院	総計
申請数	31	5	21	10	4	149

教育・学習支援センター（CETL）は、学士課程教育機構の教育支援組織として、FD・SD 委員会や教務課と連携し、教員の教育改善・自己研鑽を支援するための多様な FD・SD イベントを企画・運営しています。2026年度からは、「知の統合と探究を基盤とした教育への転換支援と質保証」と「対話と協働による教育文化の醸成」という二つの重点領域を掲げ、両者を相互に連携させながら取り組みを進めています。以下は、2026年度上半期の活動報告です。

生成 AI 活用推進ミニFD

6月10日（水）、オンラインにて「生成 AI 活用推進 ミニFD『明日から活かせる教育 DX の第一歩：生成 AI で教材作成・事務作業を効率化』」が開催されました。小島健 CETL 副センター長（経済経営学部 准教授）を講師に迎え、授業設計をトータルでサポートする「Gemini in Google Classroom」の活用法をはじめ、カレンダー登録、スライド作成、議事録作成など、日常的な業務効率化に役立つ生成 AI の具体的な活用術が解説されました。また、Claude を用いた Web 教材の作成方法や、AI エージェントによる作業の自動化、さらには AI 活用時代における新たな試験環境の提案など、教育 DX を推進するための実践的な知見が共有されました。

7月29日（水）には、「生成 AI 活用推進 ミニFD『はじめての生成 AI：教育・研究・事務の下書きを安全かつ効率的に作る』」が開催されました。和足憲明 CETL 副センター長（法学部 准教授）を講師に迎え、生成 AI に関心はあるもののまだ使ったことがない教職員を対象に、生成 AI を「正解を出す道具」ではなく「下書きを助ける道具」として位置づけ直すところから解説が始まりました。生成 AI の仕組み、誤り（ハルシネーション）・機密漏洩・著作権侵害・剽窃という四つのリスクとその対策、入力内容が学習に利用されないための設定方法、プロンプト入力のテンプレート、そして ChatGPT・Gemini・NotebookLM の特徴と基本操作までが、実際の画面を示しながら丁寧に解説されました。

いずれの回にも数十名の教職員が参加し、参加者からは、「これまで時間をかけて授業をメイキングしていましたが、AI の活用によって大きく時間短縮ができるなと思いました。特に、テストやレポート作成、ルーブリック作成には大変驚きました。ありがとうございました。」「AI について出遅れているかなと気兼ねがありましたが、本当に最初の導入からお話していただけたのでこれなら賢明に活用できそうだなと思いました。」などの声が寄せられました。

■ CETL 勉強会「授業設計基礎①」

4月18日（土）、中央教育棟2F AE256教室にて、関田一彦氏（創価大学名誉教授）を講師に迎えた「授業設計基礎①」が開催され、24名の教員が参加しました。本研修では、授業設計の基本的な考え方や、学習目標の設定、アクティブラーニングを効果的に活用するための教育手法について学びを深めました。当日は、ガニエの9教授事象や ARCS モデルといった理論的なフレームワークの紹介に加え、参加者同士のペア・リーディングや振り返りなど、アクティブラーニングを実際に体験するワークが随所に取り入れられました。参加者からは「アクティブラーニングを活用した授業を学生の立場で体験しながら学ぶことができたので、効果や方法が理解しやすかったです。」「これまで『大学生なんだから』と学生の積極性を求めてしまっていたが、安心できる教室の雰囲気や導入を工夫しながら授業を進めていこうという気持ちに変わりました。」などの感想が寄せられました。

■ CETL 勉強会「授業設計基礎②・③・④」

小島健 CETL 副センター長をファシリテーターに迎え、シリーズの続編となる3回の勉強会が開催されました。5月29日（金）には「評価と目標の一貫性を考える」をテーマに②が開催され20名の教員が参加、6月26日（金）には「導入・発問・フィードバック・評価」をテーマに



CETL 勉強会②

③が開催され12名の教員が参加、7月8日（水）にはシリーズの締めくくりとして「学びを促す評価—学生の“自己教育力”を育てる」をテーマに④が開催され21名の教員が参加しました。いずれの回も、事前に共有された動画を踏まえたセッションと、参加者同士が具体的な悩みや工夫を持ち寄るグループディスカッションを組み合わせる形で進行しました。②では、大学および各学部のディプロマ・ポリシー（DP）やカリキュラム・ポリシー（CP）と授業の目標への繋がりを確認したほか、生成 AI の普及を見据えた新たな評価方法のあり方について活発な意見交換が行われました。③では、生成 AI 活用や学生の多様性といった現代的な課題に対し、参加者が実践知を共有しました。④では、最新の研究に触れながら、振り返りを“感想文”で終わらせず“次の一手”につなげるために何が必要か、効果的な振り返りの要件について学びました。参加者からは「DP や CP と自分自身の担当科目のシラバスの水準を往還しながら担当科目の位置付けをきちんと自己理解し、それを学生に適切に伝える努力をすることの重要性を改めて実感しました。」「自分の授業を振り返りながらお話を聞いている中で、言い方や構成を変えるともっと学生に伝わっていいのかも、など色々な気づきがありました。」「通常、交流することのない他学部や研究所の教員との意見交換が有意義でした。学部が異なっても、同じ課題で悩んでいたりと、別の視点で問題をとらえ工夫をされていたり。非常に楽しく意見交換ができ、参考となりました。」などの声が寄せられました。

■ 第1回新任教員スタートアップセミナー

4月18日（土）、AE256教室にて「第1回新任教員スタートアップセミナー」が開催され、新任教員を中心に24名が参加しました。司会による開会挨拶の後、グループセッションでの自己紹介が行われました。続いて、西浦昭雄学士課程教育機構長より「本学の教育・学習支援」として全学のFD活動やCETLの研修・授業改善サービス等が紹介され、各部署が連携して教員の教育力向上と学生の学修を多角的にサポートする体制についてお話がありました。さらに、西田哲史教務部長より「本学における授業運営の諸課題」と題して、学力のユニバーサル化やアカデミック・インテグリティ、授業課題における生成 AI 利用の考え方等についてお話がありました。その



第1回新任教員セミナー

後、質疑応答や、参加者同士の交流および研修の振り返りを行うグループセッションが実施されました。参加者からは「学内の様々なサービスや、ポータルの情報について知ることができた。」「同じく新任として似た環境にある多くの教員の方々と情報や問題意識を共有できる機会自体が、大変貴重でした。」などの声が寄せられました。

■ 第2回新任教員スタートアップセミナー

7月17日（金）、中央教育棟2F AE256教室にて「第2回新任教員スタートアップセミナー」が開催され、18名の新任教員が参加しました。第2回は、同僚の実践から学び合うことを主眼に、教育実践報告を中心とした構成にしました。鈴木彰真准教授（理工学部情報システム工学科）からはシラバス間の連携のあり方や試験における不正への対処、生成 AI を活かした学習環境づくりについて報告があり、それぞれの後に質疑応答と意見交換の時間が設けられました。参加者からは「鈴木先生、久木田先生の授業実践や様々な工夫が大変参考になりました。来学期の授業に向けて、自分自身もよりよい授業ができるよう頑張ろうというモチベーションにもつながりました。」「理系と文系のお二方の登壇者がいらっしまったことで、自身の分野に比較的近いお話を聞けたことが有益でした。」などの声が寄せられました。

AIのグループワークでの活用について

■ データサイエンス教育推進センター長 浅井 学

■ 近年、生成AIをはじめとする人工知能技術の目覚ましい発展に伴い、大学の授業や企業研修など、教育・協働の現場における学習プロセスは大きな変革期を迎えています。とりわけ、複数人が集まって議論を深め、共通の成果物を創出する「グループワーク」において、AIは単なる「利便性の高い検索ツール」を超え、チームの思考を深め、議論を活性化させるための強力な「第Nのメンバー」としての役割を果たし始めています。

■ 従来のグループワークでは、アイデアが出ずに討議が停滞する、知識やスキルに偏りがあるために発言できるメンバーに限られる、あるいは意見調整や議事録作成といった周辺作業に時間が奪われ、本質的な議論の時間が減少するといった課題が散見されていました。しかし、AIを適切に議論のプロセスに介在させることで、これらの課題を劇的に解決し、グループ全体の知性を引き出す「知的エンハンスメント」が可能となります。

■ まず、グループワークの初期段階である「アイデア出し（ブレインストーミング）」において、AIは極めて有効な触媒となります。人間の発想には、どうしても過去の体験や専門領域に縛られた「無意識のバイアス」が生じがちです。そこで、AIに対して「この問題について、通常とは異なる視点から5つのアイデアを出して」といった指示を与えることで、チームの思考の枠組みを揺さぶる「問い」や「視点」を瞬時に提供させることができます。AIから提示された突飛なアイデアや新たな切り口をベースに議論を広げることで、発想の起点となる「ゼロからイチを生み出す負担」が大幅に軽減され、参加者はより多角的かつ創発的な議論へ即座に入り込むことが可能となります。

■ 次に、議論の中盤における「思考の整理・検証」および「悪魔の代弁者（デビルズ・アドボケート）としての役割」です。チーム内で特定の意見に傾倒しがちな場面や、雰囲気優先で同調圧力が生じそうな場合、AIに「この提案の弱点やリスク、見落としている反論を指摘してください」とプロンプトを入力することで、批判的思考（クリティカル・シンキング）を客観的なデータに基づいて導入できます。人間同士では角が立つような鋭い指摘も、AIという外

部のプレゼンスを介することで、摩擦を恐れずに建設的なレビューを行えるようになります。また、議論が混迷を極めた際には、そこまでの発言録をAIに入力して「現在の議論の争点と対立軸を要約して整理して」と指示することで、チーム全体のメタ認知（現在の立ち位置の客観視）を促すことも容易になります。

■ さらに、成果物の取りまとめや表現の精緻化といった最終段階においても、AIは高いパフォーマンスを発揮します。議論の要約、プレゼンテーション資料の構成案の作成、あるいはプログラミングコードや英文の校正など、作業的なフェーズをAIに肩代わりさせることで、グループは「最終的な意思決定」や「質疑応答のシミュレーション」といった、人間にしかできない高次な思考活動に最後まで集中することができます。

■ しかしながら、AIをグループワークに活用する際には、相応の留意点と倫理的姿勢が求められます。第一に「思考の放棄（AIへの依存）」を防ぐことです。AIが出力したもっともらしい解答をそのまま議論の結論として鵜呑みに（コピペ）してしまえば、グループワーク本来の目的である主体的な思考力やコミュニケーション能力の育成は阻害されてしまいます。AIの回答はあくまで「検討の素材」や「仮説の1つ」として捉え、必ずメンバー自身の批判的な目によるファクトチェックと再構築を行わなければなりません。

■ 第二に「情報リテラシーと倫理的配慮」です。グループワークで取り扱うデータやアイデア、未公表の研究内容、個人情報などをオープンなAI環境に不用意に入力しないよう、情報漏洩やセキュリティに対する意識の徹底が不可欠となります。

■ これからの時代のグループワークは「人と人との対話」だけでなく、「人と人とAIの三者による協働」へと進化していきます。AIを用いたグループワークを積極的に活用していくためにも、「AIを前提とした課題設計や成績評価ルーブリックの作成」をはじめとする具体的な授業改善について、データサイエンス教育推進センターとしてCETLと協力しながら進めてまいりたいと考えております。



創価大学

創価大学学士課程教育機構ニュースレター [SEED] 第32号
発行日 2026年10月1日
発行者 創価大学学士課程教育機構
〒192-8577 東京都八王子市市木町1-236
<https://www.soka.ac.jp/seed/>

